

どうやったら公平に分配することができるか 「文化的スクリプト」の抽出にむけて

白百合女子大学	宮下 孝広
日本学術振興会	加藤千恵子
	真島 真里
日本獣医畜産大学	柿沼 美紀
文京学院大学	東 洋

Preliminary Analysis to Find out “Store of Cultural Scripts” Fair Distribution of Money as an Example

Shirayuri College

Japan Society for the Promotion of Science

Nippon Veterinary and Animal Science University

Bunkyo Gakuin University

MIYASHITA, Takahiro

KATO, Chieko

MASHIMA, Mari

KAKINUMA, Miki

AZUMA, Hiroshi

判断や行動の背景にあると考えられる文化的スクリプトを同定し抽出するため、PS 質問紙の 12 万円を 3 人に公平に分配する課題の自由記述部分の再分析を行った。

その結果、学年があがるのに伴って、状況に応じた分配方法を選ぶ傾向が強くなること、仕事に対する貢献を重視するわけ方が選ばれるようになること、一方で複数の基準を合わせて 3 人をすべて順序づける傾向が減っていくことなどが見出された。また理由の分析によって、並立する基準が意識され、適切なわけ方を選び取ろうとする考え方がうかがわれる一方、「がんばり」という別の基準への解消や、分配後に生じるネガティブな感情の推測に基づく平等な分配の選択も見られた。

今後さらに文化的スクリプト同定に向けて、方法を工夫する必要があると考えられる。

【キー・ワード】文化的スクリプト、分配、公平、PS 質問紙

We reanalyzed “Fair Distribution of Money” Problem in PS Questionnaire to find out store of “Cultural Scripts”.

High-school students, compared with junior-high and elementary students, tended to choose those ways that fit the situations in each instruction. They also tended to adopt single criterion,

even if there are two competitive criteria to distribute money. And the tendency to rank three persons using two criteria simultaneously seemed to decrease.

Some students adopted another criterion like “*ganbari* (effort)” to rank three persons in one dimension. And some other students chose to distribute equally, otherwise they would have got negative emotional responses from three persons.

These findings make us understand deeper what students think to be fair way to distribute money. However, more studies are needed to identify what is “Cultural Scripts.”

【Key Words】 Cultural Scripts, Distribution, Fairness, PS Questionnaire

問 題

文化と心理の関係は複雑であり、文化間比較でよく用いられるような、国の違いを独立変数に相当するものとして扱う方法では、その詳細を必ずしも明らかにできるとは言いがたい(東, 2000)。例えば、ある金額のお金を複数の人に分配する際に、各人の働きがどれくらい全体の利益に貢献したか、その貢献度を重視して分配する方法を好ましく思う傾向は、日本の子どもに比べてアメリカの子どもの方が顕著である(柿沼他, 2000)。このことを日本とアメリカの文化の違いであると言うことは容易だし、よく耳にする「個人主義」や「自己主張」といった概念によってなされる説明は理解しやすいものになるであろう。しかし、その研究では同時に、各人の必要度を重視して分配する方法を好ましく思う傾向もアメリカの子どもたちの方が顕著であり、半面、同じ金額で平等に分けるべきと考える傾向は両国間で変わらないことも明らかにされている。これらの結果を一貫して説明する概念とは何であろうか。

個人のレベルで見れば、さまざまな条件にもかかわらず、平等に分けると考える人もいることであろう。そのような考え方は「一貫した」考え方であるし、どのような場合でも、必ずそうすると予測できるという意味で「わかりやすい」考え方ではある。しかし、分配を受ける側の各人の間で、例えばある人は仕事場にはいたがなすべき仕事を怠けていた場合もありえよう。そのような時でも平等に分けるやり方を取り続けることができるだろうか。明らかに不公平に感じられる場合もあるだろうし、平等に分けた後に、まじめに仕事に励んだ人々から出された不満に出会うこともあるだろう。その際に不満に思う理由を聞かされることもあるかもしれない。そのような経験を通して、何が公平な分配方法と考えるかについての概念が構成されていくとすれば、それは、様々な条件や要因が綴り合わされ、与えられた情報からその都度、最もふさわしい物語、ないし説明が紡ぎ出されるようなスクリプト様のものであると考えることができよう(東, 2000)。

このように、社会・文化的な経験によって構成される個人のスクリプトは、当然その社会や文化が持つ集合的なスクリプトの影響のもとに形成されると考えられ、したがって、例えば日本人の間

で優勢なスクリプトを想定することができるだろう。例としてあげた研究も集団間の比較という方法を取っており、そのような比較が意味を持つとすれば、そこに結果として表われた集合的なスクリプトとは何かを探求することであろう。

本論文においては以上のような問題意識のもとに、ある金額の分配をもっとも公平にするにはどうすればよいかという課題に対する記述を分析することを通して、文化差を説明する媒介概念としての文化的スクリプトとは何かについて探索することを試みる。

方 法

PS 質問紙を用いて東京都区内の小学校 6 年生・中学校 2 年生・高等学校（高等専門学校）1 年生計 957 名（内訳は表 1 参照）に行った調査（柿沼他, 2000）の内、「公平な分配」3 問（「奨学金」問題、「ボーナス」問題、「賞金」問題。教示文はそれぞれ表 2 参照）の自由記述部分、すなわち 12 万円を 3 人にいくらずつ分けると一番公平になるか、各自の金額とそのように分配する理由を記入してもらった部分の分析（柿沼他, 2001）を再度改めて行った。

結果と考察

分配金額の分析 まず分配された金額に注目すると、教示文に登場する人物 A・E・J に最も多く配分するならば、それは教示文で設定された仕事等に対する貢献を重視する考え方であると考えられる（貢献度重視）。同様に人物 C・G・L に最も多く配分するならば、それは生活に対する必要を重視する考え方（必要度重視）、そしてそれぞれ 3 人に同じ額だけ配分する場合は平等を重視する考え方であると考えられる（平等）。

それぞれの問題で、学年ごとにどの分け方が選ばれたのか分類してみると表 3～5 のような結果となった。なお、ここでの分類以外のやり方で分ける（例えば「奨学金」問題で、A・C の両者に同じ額だけ多く配分し、B は少なくする）者も少数あったが今回は分析から除いた。また合計が 12 万円と異なる金額が記入されたものも同様である。

（表1）調査協力者

	小学校6年生	中学校2年生	高校1年生	合計
男子	98	212	182	492
女子	99	185	143	427
性別不明	8	12	18	38
合計	205	409	343	957

(表2)各問題の教示文

奨学金	ある大学では、大学で学ぶためにお金を必要としていて、しかも恵まれない人のための活動に熱心な学生に、奨学金が支払われます。金額は月12万円です。地方出身で、大学の寮から通っている3人の学生A、B、Cが申し込みました。Aは、必要なお金の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Aは、文化祭で行われる恵まれない人のためのチャリティーバザーのために、6万円分の品物を集めました。Bも、必要なお金の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Bも、文化祭で行われる恵まれない人のためのチャリティーバザーのために、3万円分の品物を集めました。Cは必要なお金はすべて自分で出さなくてはならず、いくつもアルバイトをしています。Cも、文化祭で行われる恵まれない人のためのチャリティーバザーのために、3万円分の品物を集めました。
ボーナス	E、F、Gの3人は環境を守る会のためにアルバイトをしています。仕事は、それぞれの近所を回って、石けんや洗剤など、環境に悪い影響を与えない品物を売ることです。売り上げは環境を守る会に納められます。3人は地方出身の大学生で、それぞれの大学の寮に住んでいて、お互いのことを知りません。Eは、生活費の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Eは、この1ヶ月間に6万円分の品物を売りました。Fも、生活費の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Fは、この1ヶ月間に3万円分の品物を売りました。Gは、生活費はすべて自分で出さなければならず、いくつもアルバイトをしています。Gは、この1ヶ月間に3万円分の品物を売りました。
賞金	大学生J、K、Lは、あるクイズ番組の優勝チームのメンバーで、賞金12万円を獲得しました。3人は一年間クイズの勉強を重ねてきました。Jは、生活費の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Jは、クイズでチームのために60ポイント得点しました。Kも、生活費の大部分は親に出してもらっていますが、アルバイトをして足りない分を補っています。Kは、クイズでチームのために30ポイント得点しました。Lは、生活費はすべて自分で出さなければならず、いくつもアルバイトをしています。Lは、クイズでチームのために30ポイント得点しました。

「ボーナス」問題の5年生の分布を除き、いずれの学年でも問題の設定に応じて、「奨学金」問題では必要度重視、「ボーナス」問題では貢献度重視、そして「賞金」問題では平等の分け方が、他の問題に比べて割合が高くなっている。さらにこのような分布の偏りは学年が上がるに従って著しくなっている。

次に、2番目と3番目の配分額に注目すると、同じ額だけ配分されている場合と違う額になっている場合とに分けられる。例えば「奨学金」問題でCに6万円（必要度重視）、残りをAとBに同じ3万円ずつ分配すると考えた場合、AとBとは貢献度は2倍の開きがあるが、必要度において差はない。このような2人に同じ額だけ分配するのであるから、必要度のみが分配の基準とされていると考えるべきであろう。一方、Aに5万円、残りの7万円をBに4万円、Cに3万円分けるという分配方法においては、貢献度が優先され、次に、貢献度に差がないBとCの場合には2人に差がある必要度が分配の基準として用いられていることになる。すなわち分配に際して主たる基準と従たる基準が併用されていることになる。それぞれの問題で、学年ごとに、単一の基準（貢献度重視または必要度重視）を用いて分配した者と複数の基準（貢献度を主、必要度を従とする場合（貢主必従）と、

(表3)「奨学金」問題の回答の分類

学年	貢献度重視	必要度重視	平等	計
小学校6年	17	123	45	185
中学校2年	28	268	90	386
高校1年	9	248	73	330
計	54	639	208	901

(表4)「ボーナス」問題の回答の分類

学年	貢献度重視	必要度重視	平等	計
小学校6年	18	121	40	179
中学校2年	103	178	98	379
高校1年	116	141	63	320
計	237	440	201	878

(表5)「賞金」問題の回答の分類

学年	貢献度重視	必要度重視	平等	計
小学校6年	45	69	70	184
中学校2年	92	108	173	373
高校1年	59	76	175	310
計	196	253	418	867

必要度を主、貢献度を従とする場合〔必主貢従〕)を用いて分類した者の人数を集計したのが表6～8である。小学校6年生では複数の基準を用いる者がどの問題でも多く、中学校2年生・高等学校1年生の場合は問題によって両者ほぼ同数か単一の基準の方がやや多いこともあるという結果となっている。貢主必従に比べて必主貢従の場合の方が単一の基準を用いる場合に比べて割合が高く、小学生でその傾向が強いことが見てとれる。

さらに、複数の基準が用いられている場合で、金額の差が最少の場合、すなわち、多い順に5万円、4万円、3万円と分けるやり方がどれくらい取られているか数えてみる。貢献度を主、必要度を従とする回答の内、A・E・Jに5万円、B・F・Kに3万円、C・G・Lに4万円分配する方法をとるものは、小学校6年生で47回答中29、中学校2年生で109回答中90、高校1年生で63回答中44であった。また必要度を主、貢献度を従とする回答の内、A・E・Jに4万円、B・F・Kに3万円、C・G・Lに5万円分配する方法をとるものは、小学校6年生で210回答中89、中学校2年生で334回答中143、高校1年生で271回答中114であった。貢献度を主とする分配基準では差があまり開か

(表6)「奨学金」問題の貢献度重視・必要度重視の回答の単一基準・複数基準による分類

学年	単一の基準		複数の基準	
	貢献度重視	必要度重視	貢主必従	必主貢従
小学校6年	4	50	13	73
中学校2年	12	114	16	154
高校1年	4	119	5	129
計	20	283	34	356

(表7)「ボーナス」問題の貢献度重視・必要度重視の回答の単一基準・複数基準による分類

学年	単一の基準		複数の基準	
	貢献度重視	必要度重視	貢主必従	必主貢従
小学校6年	10	34	8	87
中学校2年	60	62	43	116
高校1年	83	49	32	92
計	153	145	83	295

(表8)「賞金」問題の貢献度重視・必要度重視の回答の単一基準・複数基準による分類

学年	単一の基準		複数の基準	
	貢献度重視	必要度重視	貢主必従	必主貢従
小学校6年	19	19	26	50
中学校2年	44	44	50	64
高校1年	33	26	26	50
計	96	89	58	164

ないようにする分配方法の割合が高く、必要度を主とする場合はそれに比べるとどの学年でも割合は低くなっている。

理由の記述の分析 現在のところ、まだ組織的・網羅的に分析できていないわけではないため、抽出したいいくつかの記述を材料に考察を進めることとする（なお、本論文の分析対象ではないが、同じ課題に対する小学校6年生・中学校2年生の記述内容を参照することができる（東，2002）ので、ここであげる事例は高校1年生のものとした）。

貢献度重視の分配方法に対する理由づけの例としては次のようなものがある。

「アルバイトのボーナスなのだから家庭環境のちがいは理由にならず売りに上げに比例したものがいちばん公平だと思う」（E：6万，F：3万，G：3万；ID番号101075）

「Eが一番売ったから。Gはアルバイトが忙しいのにもかかわらずFと同じだけ売ったから」（E：5万，F：3万，G：4万；ID番号103081）

必要度重視の理由づけの例は次のとおりである。

「奨学金とは学ぶために必要とされるお金を支払うものなのでチャリティーバザーの品物を集めた

値段は関係ない 少しでも C がバイトをしなくて勉強ができるようにしてあげるべき」(A: 3 万, B: 3 万, C: 6 万; ID 番号 101062)

「A は必要なお金の大部分は親にだしてもらっているけど、チャリティーバザーのために 6 万円分の品物を集めるほど、積極的だから。B は、A と同じ部分もあるけどチャリティーバザーのために出す品物は 3 万円分で、あまり多くないから (A とくらべて) C は、いつもアルバイトをしているので大変なのにチャリティーバザーのためにも品物を集めたから。」(A: 4 万, B: 3 万, C: 5 万; ID 番号 101088)

平等の例は次のとおりである。

「理由はどうあれ、金額に差をつけられたら少なくされた人が納得いかないと思うから」(J: 4 万, K: 4 万, L: 4 万; ID 番号 101106)

「みんなで協力して獲得したから、生活費がどうかは関係ないと思うから。もし、自分がピンボでも、そうされたらどうしようみたいでいや」(J: 4 万, K: 4 万, L: 4 万; ID 番号 102032)

貢献度重視(「ボーナス」問題)、必要度重視(「奨学金」問題)の課題については、仮説どおりに、各人の仕事等への貢献、生活の必要を考慮して分配しようとしていることが窺える記述が多い。さらに、101075 番や 101062 番の協力者のように、2 つの基準をあげて、課題で設定されている状況に合致する基準はどちらかを判断している理由づけも見られる。

また、「がんばってると思う人順、A は自分も大変なのに人のためにもがんばっている」(A: 4 万, B: 3 万, C: 5 万; ID 番号 101023)「ボーナスはがんばった人にたいしてのごほうびのようなものだから」(A: 6 万, B: 2 万, C: 4 万; ID 番号 101063)のように、「がんばる」すなわち「努力」という別の基準を持ちこむことによって、一つの次元の上で 3 人を位置づけようとする考え方もあるように思われる。103081 番の「G はアルバイトが忙しいのにもかかわらず F と同じだけ売ったから」や、101088 番の「C は、いつもアルバイトをしているので大変なのに」という記述にもこのニュアンスが含まれていると考えられる。

一方、平等の理由づけについては、納得がいけないとか、同情のようだとかのように、均等でない分配の方法をとった場合に、ネガティブな反応が出ることを予想して、それを防ぐ回避のために平等という分配方法を選ぶという考え方が窺える。またネガティブな反応が感情的なものであることも興味深い。

まとめ 分配された金額の分析に見られたように、分配にあたって、その状況や文脈に応じた方法が選ばれるようになると思われる。一方で、分配方法の選びやすさは異なるようである。すなわち、頻度の順で言えば、必要度重視が最も選ばれやすく(表 3~5 でそのように分類された頻度の合計 1332)、平等がそれに次ぎ(同じく 827)、貢献度重視は最も少なく(同じく 487)、とくに小学生には貢献度重視は選ばれにくい分配方法であった。

また主として選ばれた分配方法が分配過程で必ずしも一貫して用いられるわけではないことも明

らかになった。2番目, 3番目の配分者を決定する際に主たる分配方法とは別の分配方法が用いられる場合があり, そのような傾向は必要度重視を主たる方法, 貢献度重視を従たる方法として用いる場合に多く見受けられた。ただ, 複数の基準が用いられる傾向は小学生に比べて, 中学生・高校生で減るようである。

分配金額にどれくらい差をつけるかという点では, 多い順に5万円, 4万円, 3万円と分配する方法は複数の基準を用いる「必主貢従」の場合に比べて, 「貢主必従」の場合に多かった。金額の差が, その基準を当てはめることへの自信を反映するのだと考えれば, 貢献度重視の考え方に自信を持つことは難しいと考えるべきなのかもしれない。

理由の記述の分析からは, 設定された貢献度重視, 必要度重視, 平等の考え方が読み取れたが, ここで探求している「文化的スクリプト」にたどり着けたかどうかは現段階では残念ながら明らかではない。ただ, 競合する基準を並べて, どちらを選ぶべきか考えたり, 複数の基準を併用するのではなく, 「がんばり」といった別の次元に解消しようと考えたり, また, 分配を受ける側(当事者)のネガティブな感情を推測して妥当な(あるいは無難な)方法を選ぼうとしたりすることなど, この問題を解決する際の考え方的一端は明らかにされたと言える。

分配に関しては様々な要因が絡んでくると思われる。例えば, 分配する人・される人の持つ特性, 当事者間の人間関係, 状況の違い, そして文化的要因があげられる(田中, 1997)。最後の文化的要因は他の3つの要因にも影響を与えていると考えるべきであるし, それぞれの要因の内実はかなり複雑なものであろう。それらを解きほぐす方法として, 内的な分析に踏み込んだ文化間比較(東, 2000)をはじめ, さらなる工夫の必要があると考える。

引用文献

- 東 洋. (2000). 文化心理学の方法をめぐって: 媒介概念としての文化的スクリプト. *発達研究*, **14**, 113-120.
- 東 洋(研究代表者). (2002). 社会的判断の国内下位文化による変動の研究: 文化間変動と文化内変動因の交差妥当化の試み. 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)課題番号 11410036)研究成果報告書.
- 柿沼美紀・宮下孝広・芳賀明子・赤坂寅雄・久家義久・東 洋. (2000). 社会的意志決定に対する理解・態度に関する日米比較研究: 構造的特質及び発達の变化. *発達研究*, **14**, 95-102.
- 柿沼美紀・宮下孝広・東 洋. (2001). 社会的意志決定に対する理解・態度に関する国内比較研究. *発達研究*, **15**, 101-106.
- 田中堅一郎. (1997). *報酬分配における公平さ*. 東京: 風間書房.

どうやったら公平に分配することができるか

<付 記>

本論文のデータ分析は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」(課題番号：14310062; 研究代表者：東 洋)の一部として行われた。

